コールグローブ先生を送る

東　山　節　子

正式にはC. Lee Colegrove教授、日本流にはコールグローブ先生、短くコール先生、あるいはコールさんの愛称で親しみ大いに頼りにしてきた先生が、非常勤でご出講いただけるとはいえ、退任される事になった。わかっていたことではあるが、残された者としては心細さを感じずにはいられない。先生は1961年から英米文学科の最初の外国人専任教員として、学科と共にほぼ40年の年輪を重ねてこられた。現在の英米文学科のスタッフのなかで、古きよき時代からさまざまな体験をされている最古参の貴重な存在である。この40年余り先生は変わることなく、暖かく、時に厳しく、熱心に学生の指導にあたり、鋭い眼力で移り変わりを見守り、知恵を授け、力を注いでこられた貴重な生き証人でもある。いやその恩恵を英米文学科が独り占めしたわけではない。約40年にわたり、Annual Report, News Letterあるいは研究論文のレジュメなど、本学から発信される英語で書かれたほとんどすべてのものは彼の目をとおり国内外に送られていた。特にNew Yorkにある協力委員会とまだ関係が深かった当時、英語の文書が多く、大学としてもどれ程先生に長年英語でお世話になってきたことか、まさにこの方面でも'Service & Sacrifice'を大いに実践された。退任にあたり、いかにコールグローブ先生が余人をもって代えられない方であるかということを改めて痛感している。

コールグローブ先生と本学との最初の出会いは1955年12月、英米文学科非常勤講師として勤められた時に遡る。徴兵制度で占領下の日本に始めて来日された年である。人の一生には時代という焼き印のようなものがついてまわることが多いが、コール先生についても、時代と切り離せないという思いが強い。大学時代から今でいうエリートコースを、名誉ある奨学金を得て歩まれた。コロンビア大学大学院で修士を終えられ、イリノイ大学で教鞭をとられた後、当時のアメリカの徴兵制度の下、1955年6月に来日され横浜に配属になった。同年の夏東京女子大で教員の募集があることを知り、応募、インタヴューの後、10月に採用され非常勤の英語教員として仕事につかれた。まだ除隊前ではあったが、修士号をもった若者への特別な配慮が与えられたようである。兵役義務を終えられた1957年、非常勤講師を辞し、ミシガン大学大学院で専門分野の演劇研究の研鑽を積まれた後、1961年6月に英文学で博士号を取得された。その時の専攻はThomas Middletonとその時代の演劇である。「その時代」にShakespeareがふくまれていたことはいうまでもない。先生はアメリカの大学で教える事より再び来日することを選ばれ、1961年9月から英米文学科の助教授として迎えられ、1966年12月に教授に昇任された。先生の専門分野はその人となりの幅の広さと同様多岐にわたるが、トップの座をしめるのは大学時代から一貫して演劇である。業績も

主として演劇の分野であるが、創作もある。一番最初にあげるべきは、Ph. D を取得された 1961 年の論文 *A Critical Edition of Thomas Middleton's "Your Five Gallants"* であろう。Thomas Middleton は 17 世紀前半に数多くの劇を書いたロンドン生まれの劇作家である。この博士論文は 1979 年に Garland 出版社から、エリザベス・ジャコビアン演劇批評シリーズの一冊をかざる単行本として出版されている。先生の劇作家への興味は、Shakespeare、劇団四季によって日本でも紹介された「エクウス」を書いた Peter Shaffer、同じく 20 世紀の劇作家 Willy Rusell など、広くそして深い。これらの演劇論はさらに歌舞伎や能など日本の文化論とも結び付いていく。特に Shakespeare と歌舞伎との比較については、1980 年代の始めにすでにいろいろな折に御自分の考えを述べている。日本の古典芸術もコール先生を日本に、そして女子大に再び呼び戻すのになんらかの影響があったのではなかろうか。Peter Shaffer については「英米文学評論」、"On Looking into Shaffer's 'Equus' Once Again," *Essays and Studies in British and American Literature*, Vol. 25, 1979. を、また Willy Russell については、"The Plays of Willy Russell: From Liverpool to the Beach," (同上、Vol. 38, 1992.) を参照し、その独自に展開された鋭く冴えた演劇論に注目されたい。演劇にとどまらず小説についても研究されている。ひとつだけ紹介するなら、学生に人気のある Katherine Mansfield と Joseph Conrad について「英米文学評論」に発表された論文 "Katherine Mansfield and Joseph Conrad: A Possible Borrowing," (同上、Vol. 39, 1993.) である。日本で発表された研究論文のテーマが、演劇であれ、小説であれ、あるいは創作であれ、先生の背後にある大きな目的は、学生の文学にたいする興味の範囲をできるだけ広くしたいという教育的配慮であった。先生の講義に刺激され啓発された東京女子大学の卒業生たちが、現在、本学、他大学、あるいは演劇界で、すぐれた英文学または Shakespeare 研究者、翻訳家として活動している。演劇が中心分野とはいえ、広い知識と経験を活かして詩や小説の研究をも指導され、必要に応じて英文学のみならず米文学をもカバーするという得難い力を発揮された。

文学だけではなく、本学の英語教育についての貢献も忘れてはならない。1962 年に最初の LL が設置されたとき、本学独自の教材を作成し、録音にあたり、当時いち早くリスニングテストを導入して、現在の外国人による英語プログラムの基礎を固められた。また辞書や会話の教科書等を編纂し日本の英語教育の一端をも担った。小川芳男氏と協同執筆された *Senior English Dictionary* (旺文社) からは、多くの人が恩恵を受けたに違いない。英語トレーニング用にと探偵小説を書かれたり、その多彩さに目をみはったこともある。

'Quiet American'—言動は控えめで我を通さず、妥協を知る大人であり、日本人同僚とよい関係を保ち、礼儀正しく、人にやさしく、人間関係を長く大切にする。「悪名高き」ジョークの常習者でもあった楽しいコール先生に、これまで当たり前のようにしてどれだけ頼りにしてきたかを今更のように思い、感謝の念にたえない。